原著論文

日本型地域ネットワークを活用した持続可能な地域SNSの設計と運用

和崎 宏

兵庫県立大学大学院環境人間学研究科

SOCIAL NETWORKING SERVICE USING JAPAN TYPE TRADITIONAL COMMUNITY NETWORK

Hiroshi WASAKI

University of Hyogo Graduate School of Human Science and Environment, 1-1-12 Shinzaikohmachi, Himeji-shi, Hyogo, 670-0092, Japan

Abstract: The activity of “Local community SNS” is now in the limelight for the reason it is effective to the local revitalization. However, not a few “Local Community SNS Sites” are now in the “landing state”, and are deadlocked at the management. In this thesis, I introduce the design concept and the applying method of “Our Local community SNS” succeeded in developing by using the interdisciplinary study or tying up the knowledge of variegated scientific research. Furthermore, clarify the sustainability of “Our local community SNS” obtained through the social experiment.

Keywords: Community network, Local community SNS, social capital, KOU

1. はじめに

平成19年度版国民生活白書のタイトルは「つながりが築く豊かな国民生活」である。白書は、生活全般に対して満足している人の割合が低下していることを指摘し、国民が物質的豊かさから精神的豊かさを求める方向にシフトしているとしつつ、昨今、精神的やすらぎと生活の豊かさをもたらす「つながり」が徐々に希薄化しており、その再生が急務であると述べている。従来からあった地域や家族の相互の結びつきや絆、そして相互扶助の意識や信頼が崩れ、コミュニティの中では個々の生活における疎外化や孤立化が急速に強まってきていることへの危機感を提起している。

1995年1月の阪神淡路大震災では、避難所となった小学校等の施設で、希薄化したと言われていた地域のつながりがしばらく実体化した。ライフラインを停止させるような大規模な自然災害が起ると、被災後100時間から1000時間にかけて、避難所全体が充足感で満たされる期間が出現する。東アジア地域においてみられる災害ユートピア (disaster utopia) である。この現象は、満足以供給されない食べ物を分け合うなど、誰もが弱者に手を差し伸べて生きるために助け合うことで、消えかけていると考えられていたつながりが復興する可能性を持っていることを表している。古くから日本の地域社会を支えてきた住民の絆は、「個人主義の台頭や徹底した西洋化の浸透による地域環境の変化によって消失したのではなく、沈潜化して見えなくなっていた」[1] だけなのである。

本論では、「地域住民の関係性の可視化と活性化に役立つと期待されている地域SNS」[2] の現状と課題について紹

介するとともに、感性工学的視点から求める関係性価値創造の手法としてICTと伝統的な日本型地域ネットワークを融合的に応用することが効果的であることを、新たに筆者が開発した地域SNSエンジン「OpenSNP¹ (オープンエスエヌピー)」の効果から考察するとともに、全国各地の地域SNSサイトの事例を参与観察²することによって明らかにする。

2. 静かに広がるまちおこしのSNS

参加者が互いに友人を紹介しあい、ネット上で交友関係を広げるコミュニティ型ウェブサイト・SNS (ソーシャルネットワーク・サービス)。この仕組みを応用し、住民の見えないつながりを可視化することで、地域おこしや防災・防災情報の発信などという従来のSNSにはない目的や特色を備えた地域限定型の取り組みが、いま全国各地に広がっている。

SNSは一般に会員の招待がないと参加ができず (招待制)、参加者は名前や住所などのプロフィールを事前に登録する必要がある。日本では一千万人以上の会員を擁するmixi (ミクシィ) が有名だが、米国には二億人が登録しているMySpace (マイスペース) があるほど、現在では広く世界中で多数の人々が利用している。

しかし、SNSもサイト全体が巨大化するにつれて、インターネットの負の部分が増大化し、生命や財産を脅かすなど危険な状況が目立ってくる。「荒らし」「祭り」「炎上」と呼ばれるようなネット特有の現象に止まらず、詐欺や薬物、自殺など青少年を巻き込んだ犯罪にまで広がり、米国議会では若年者を交流型サイトから守る趣旨の法案 (通称MySpace法) が提出されたり、mixiでも事件や事故が多発しており、大規模SNSサイトの信頼性は急速に低下している。

図1 地域SNS「ひよこむ」のトップページ

3. 地域 SNS の特徴とメリット

地域 SNS は、地域性を活かして信頼できる人の関係をつなぎながら、外部のインターネットからは閉鎖された状況を作り、内部からは発信する情報に応じてアクセス制御ができるなど「ほどよい閉鎖性を保ったネットワーク」環境を成立させることで、インターネットの悪しき特性を排除し、安心・安全なサイト環境を提供しているものが少なくない。会員の大半は直接交流できる地域に住んでいるので、会員同士が対面する機会が極めて多い。ネット社会の「出会い系」のように仮想空間での交流だけを楽しむのではなく、一緒に地域活動に参加したり、オフ会と呼ばれるイベントで意気投合したり、互いの経験や人脈を使って支え合ったりして、実社会とネットを上手に融合させながら、自分自身を高めることができる。2008年2月段階で336サイトの地域SNSが確認されている[3]。

地域 SNS は、インターネットを使っていながらも実社会との距離が非常に近いので、架空や虚偽の人格で利用することは難しい。併せて、実名登録や招待制を徹底させるなど比較的厳しい運用ルールを設けているので会員同士の信頼感が醸成されており、「2ちゃんねる」³等で話題となる匿名性の高いネット社会特有の現象はほとんど見られない。(実名性の確保と匿名性の排除)

また、もともと SNS は個人と個人が繋がる仕組みとして設計されているが、OpenSNP では個人とグループやグループ同士の連携が生まれやすい機能を実装している。全体で共

有できる地図やカレンダーは、知らず知らずのうちに協働意欲を起こさせたり、便利なグループウェア機能は地域活動の活性化に一役買っている。(グループウェアとの融合)

このように、信頼性の高い環境の下で、地域活動に積極的にコミットした住民たちが交流する地域 SNS の利用者は、行政にとっても格好のパートナーとなる可能性を持っている。地域 SNS の原点である熊本県八代市の「ごろっとやっちょろ」は、市民向けの電子掲示板を交流サイトに衣替えした結果、絶好の広報基盤になったといわれている。兵庫県と OpenSNP のリーディングサイト⁴である兵庫県域の地域 SNS 「ひよこむ」では、交流型パブリックコメントの実施、委員会・審議会での利用、官民協働の研究活動の基盤など、単なる広報広聴の域を越えた連携の取り組みが実証実験⁵の中で深まっている。

4. 地域 SNS の現状と課題

わが国の地域 SNS サイトの平均参加者数は、1,328 人であるが、これは規模の大きなサイトに引き上げられている傾向が強い。その分布を見ると 400 人以下が最も多く、ついで 800 人以下となり、これが全体の 6 割を占めている。大規模なサイトでも、その参加者数は佐賀県の「ひびの」の 8,680 人、福岡県の「VARRY」の 5,816 人、兵庫県の「ひよこむ」の 3,995 人(いずれも 2008 年 7 月現在)となっており、mixi 内最大の地域コミュニティ「I Love Yokohama」の約 5 万人と比較してもひと桁少ないのが現状である[4]。

サイトの持続可能性を維持するためには「にぎわい」の継続が不可欠である。一概に参加者数だけで評価することはないが、地域 SNS サイト運営者らによると⁶によると、数百人規模のサイトでは運営者自身が相当の努力をしなければサイト内でのにぎわいを創り出すことは難しく、一千人を超えたあたりから自律したコミュニケーションの活性が実現したという。また、ユーザ数が十万人にもなると、規模が大きくなりすぎて、システムの運用管理だけでなく、地域 SNS の「ほどよい閉鎖性」という特質が活かせなくなることから、幅は広いが数千から数万人の間が適切な参加者数な

図2 地域 SNS の規模別サイト分布 (筆者が作図)

のであろうと考えられる。しかし現在は、まだ半数以上のサイトがその域に達してはいない。

若者中心の mixi と比べて、平均年齢が高いことも地域 SNS の特徴である。mixi の場合、35 歳未満の利用者がパソコンで 8 割、携帯電話からの 9 割以上を占め、その平均は 28 歳前後である [5]。これに対して筆者による SNS サイトの調査では、「ひょこむ」(兵庫県 3,995 人)は 43.5 歳、「かちねっと」(葛飾区 549 人)では 47.3 歳、「ハマっち!」(横浜市 1,551 人)でも 39.0 歳(いずれも 2008 年 7 月現在)と、mixi とは一回り以上の違いがある。携帯電話からの利用も僅か数パーセントに止まっている。また女性が 6 割を占める mixi に対して、ほとんどの地域 SNS は男性が多数で、その比率はほぼ 2 対 1 のものが多い。これは、個人的つながりを求める mixi と異なり、地域 SNS が「まちづくり」などの具体的な目的を明確にしていることが、テーマに関心のあるより高い年齢層の仲間達を招待しているからであろうと推測される。また、地域 SNS の運営者は圧倒的に男性が多く、彼らは比較の声が掛けやすい同性の年少者を勧誘する傾向があることから、男性中心のつながりが反映され、また運営者の年齢はサイト平均より高くなっていると見られる。

平均年齢が高く男性が多いという特徴は負の要因ではなく、サイト内のコミュニケーションに良い効果を与えている。総じて地域 SNS の書き込みは社会性が高く、文脈も文法もしっかりした文章が多い。また、古くはパソコン通信時代からネットコミュニティに馴染んだ人がいて、情報通信の知見だけでなくネットのモラルや倫理についても詳しく、他の参加者を緩やかにリードする指南役として活躍している事例が、多数の地域 SNS⁷で見られる。その結果として地域 SNS では、落ち着いた支え合いの雰囲気交流の場が成立して、利用者に快適な環境を提供しているのである。

国領二郎・慶応大学教授は、ネットワーク上で多様な主体が自発的に相互作用を行う「情報プラットホームは、情報インフラの物理基盤の上に、語彙、文法、文脈、規範を共有する言語空間が主体間の相互作用を支えるコミュニケーション基盤として構成され、その上で発信・共鳴・伝達が偶発(創発)的な協働を誘発する」[6]としているが、限定的な地域ではなくこの環境を一般的に実現している社会モデルはまだ出現していない。地域情報化の進展に伴って普及したブロードバンド・インターネットの環境が情報インフラとして機能し、相互の信頼関係と地域への愛着という共有意識の上に現実社会とネット社会の融合的空間を創り出す地域 SNS は、情報プラットホームの基盤環境を構築するのに大変適していると言える。

5. 伝統的な日本型地域ネットワークの智慧

「昔の日本はタテ社会だ」とよく言われているが、実はそれと並んで自発的に結ばれる地域のヨコのつながりである「仲間」のネットワークが存在していて、これが緩やかにコミュニティの持続可能性を醸成してきた。従来、「縁」によ

る支え合いでバランスを取りながら生きてきた人間関係は、20 世紀になって日本に出現した近代化の思想や、他の力に頼らず個別で自由に生きることを是とする考え方の広がりによって、「縁」を「しがらみ」とみなすようになり、自由で便利な生活を求め続ける人たちによって縁が切れていき、地域コミュニティとともにばらばらになってしまった [7]。

伝統的な日本型地域ネットワークの原点は、奈良時代の「神仏習合」における「講」の成立にあると言われている。まったく別の宗教的存在であった神社が仏閣を受け入れるにあたって、豪族のみならず住民が資材や資金を出し合って仏堂を建立したのである。その後、コミュニティ全体の大事業の度に「講」がたつようになる。最初は地域全体で助け合う経済講として生まれた仕組みが、より暮らしに身近な「無尽講」や「頼母子講」など経済的互助組織として存在になったり、支え合いの「結」講やコミュニティにおける環境バランスを保つための「嫁講」「観音講」「無礼講」「契約講」など、各地の実情にあわせて変化して生活に取り込まれていった。

さまざまな目的と形態を持つ講には、日常のヨコネットワークとして機能するために、(表 1)のような特徴を備えていた。これらのつながりは、まだ便利な情報通信技術がなかった時代に、主にご近所のクチコミによって「ほどよい閉鎖性を保つネットワーク」が十分に機能していた。現在、地域社会の絆感の喪失がもたらす地域環境の悪化が問題とされている中で、その解決手法の考え方にわたしたちの先祖が磨き上げた智慧の活用を検討することは、重要な気づきを与えてくれることとなった。

6. 地域 SNS の設計と開発への応用

全国各地に地域 SNS が誕生し始めた 2006 年 1 月、東京品川で CAN フォーラムが主宰する「地域 SNS を考えるセミナー」⁸が開催された。地域 SNS の最新情報を主宰者や開発者が直接発表・意見交換する初めての機会だった。国領教授によるパネルトークで、20 代後半から 30 代前半の若手実践者たちが生き生きと地域のビジョンを語る姿が印象的だった。

しかし、同じパネルに並びながらも、二回りほど年長の筆

表 1 伝統的な日本型地域ネットワークの特徴(岡田, 2008)

プロジェクト性	明確な目的を持って集まり、成就の暁には解散する
自発性	自らが縁を結ぶことを申し出、関係性の継続を図る
定日性	定期的集会を行い、ネットワークを更新し結びつきを強化する
柔軟性	目的達成のためのルール変更を容認、組織は柔軟でメンバは固定不変でない
越境性	宗派、経済格差、身分を越え、また村落など地理的境界をも越えることがある
閉鎖性	ただしメンバ更新の可能性を持ち、適度に居心地良く閉じている
入れ子構造	グループ内グループが存在する

者には単に年齢差だけではない、違和感があった。総じて他のパネリストたちの考え方は「個人が繋がれば場が創発する」という文脈が主流であり、SNSのシステム自体も「個人と個人をつなぐ」ことのみを前提に設計・運用されていた。筆者は、個人間の接続で終始させるのではなく、持続可能なSNSのモデルを構築するには「個と場、場と場」のつながりを可視化することが不可欠であると考えていた。そのためには、前章で述べた伝統的な日本型地域ネットワークの特徴や、利用者相互の「信頼」や特定の地域に対する「愛着」という感性的な要素を、しっかりとシステムや運用方法に導入することが必要で、当時企画していた地域SNSのシステムをプログラムが無償公開されている「オープンソース」のプログラム⁹ではなく、自由なアイデアを自在に実現できる新たな独自のプログラムを開発することとした。これが、「OpenSNP」と名付けられた独自のSNSエンジンであり、兵庫県域の地域SNSサイト「ひよこむ」となる。OpenSNPは単なるツールではなく、地域の情報プラットフォームを担う存在になるという設計思想から命名されている。

一般的にシステムの開発は、まず「開発仕様書」という詳細な設計図を作成しておいてから、仕様書に従いプログラミングを行う。仕様がしっかりと詰まっているかどうかはそのままシステムの完成度や工期に影響を与える。しかしOpenSNPの開発は、従来の常識とは異なっていた。事前に練り込まれた仕様があったわけではなく、開発者と利用者が対話をしながら機能を追加・修正してシステムの完成度を上げる。いわば、オンデマンドユーザーオーダーメイド（利用者の随時注文に即応した）開発手法となった。この方法は、開発側がみると直接的には開発効率は高くはないものの、ニーズにあった機能が提供できるだけでなく、普段は閉じこもり傾向にある開発者と利用者に一体感を持たせて、さながら「協働開発」を行うようなムードが双方に醸成される。地域SNSエンジンとしてのOpenSNPの完成度の高さは、この開発者と利用者の良好な関係性に依拠するところが大きい。

約3ヶ月の開発期間を経て、2006年9月に試用版が提供されたひよこむは、前述の開発者・ユーザー一体の開発手法によって生まれ、続々と機能を追加するとともに、1ヶ月後の

正式稼働には利用者も当初の3倍強（約353名）となり、着実に地域のキーパーソンたちを繋いでいった。

その後は、メンバ以外のユーザには存在も見えない「ステルスコミュニティ」や、発言やコメントがすべて実名で表示される機能（実名コミュニティ）など、心地よい閉鎖性を自由に作り上げることのできるコミュニティ管理、発言者が外部を含め公開範囲やコメント制御までできるアクセスコントロール機能、そして、サイトが巨大になりすぎて地域SNSが機能不全に陥ることを防ぎながら協調・分散するネットワークを作る「のれん分け」など、これまで「煩わしい」と検討することすら敬遠されていた、伝統的な日本型地域ネットワークを活かした関係性の仕組みを積極的に実装し、成果を挙げている。

7. 地域SNS立ち上げと運用

設計や開発だけでなく、地域SNSの開設準備や運用においても、日本型地域ネットワークの智慧は活かされた。地域SNSの主宰者によると、地域における信頼関係にあるつながりの連鎖の集合体である地域SNSは、システムを設置・運用を始める段階で、その成長はある程度予測できるという。逆に、それだけ準備段階におけるデザインが重要であることを意味する。筆者はこの点に着目して、地域SNSを立

図4 SNSエンジンのシェア分布（庄司，2008）

表2 OpenSNPの主な開発履歴（筆者が作表）

年月	主な開発内容
2006.06	開発着手
2006.09	プレオープン、コミュニティマップ、副管理人、ランキング追加、外部RSS表示を実装。
2006.10	正式オープン。
2006.12	モバイル（携帯）基本機能実装。
2007.03	グループ、コミュニティ外部公開機能実装。
2007.04	公認コミュニティ・モバイル拡張機能実装。
2007.05	実名コミュニティ実装。
2007.07	招待機能強化・メッセージ機能強化。
2007.08	地域通貨ポイント機能・SNS関連機能実装。
2007.10	ブログ・モバイル・あしあと機能強化
2007.12	動画機能試用版実装。
2008.04	モール試用版実装。動画機能携帯対応版実装。

図3 盛況だったCANフォーラム「地域SNSセミナー」（2007.01.27に筆者が撮影）

ち上げる前に心がけておかななくてはならないポイントを下記のようにまとめた [8].

- ① 最初のメンバが色を決める
- ② スタートには助走が必要
- ③ 熱い鍋を冷ましてはいけない
- ④ 人数を追うと破滅につながる
- ⑤ 完璧は成功の敵である
- ⑥ いいかげんは良いかげん
- ⑦ 主宰者自身が SNS の顔になる
- ⑧ 地域であるメリットを十分に活かそう
- ⑨ 実際に活動を行おう
- ⑩ 地域 SNS は、生活環境まで変える新時代のメディアになる

従来は連想すらされなかった伝統的地域ネットワークの要素を ICT と融合させて設計・開発・運用を行っている、その親和性の高さに気づく。これは、2004 年に米国で発表された「Web2.0」という新しいインターネット利用の概念と、そのバックボーンのひとつとなっている「オープンソース開発」の理念と、伝統的な日本型地域ネットワークの特徴に通底するところが数多いからである。

運用においては、いくつかのユニークな具体的応用例がある。そのひとつが「招待者承認」システムであり「後見制」だ。それまで SNS は、新しいメンバが参加する際に、自由に登録できるか、管理者が入会を承認するかの選択しかなかった。OpenSNP ではこれに加えて、招待者が被招待者の個人情報を確認して承認する機能を追加し、また歌舞伎の「後見」に倣い、その招待者が被招待者の普段の世話やトラブル時の仲裁などを行うこととした。招待関係双方の「絆」を常に意識することの効果は、サイト内におけるふるまいにも好影響があることが、岩手大学総合情報処理センター吉田等明准教授らの研究 [9] によって明らかにされている。

OpenSNP が日本型地域ネットワークのノウハウを利用し、他の SNS エンジンに先駆けて設計や運用¹¹に活用した主な内容は、下記の通りとなっている。

- プロジェクト性
地域 SNS サイト連携、コミュニティ管理人連携、実名コミュニティ、インターネット TV 機能
- 自発性
トモダチ紹介機能、仲人機能、コミュニティ管理機能
- 定日性
フォーラム・イベント・オフ会等の定期開催
- 柔軟性
メッセージへのファイル添付、同報メッセージ機能、グループ管理機能、イベントカレンダー、コミュニティマップ、ブログやコミュニティ返信へのファイル添付
- 越境性
地域 SNS 間連携 API、のれんわけシステム、のれん貸しシステム、コミュニティリンク機能、RSS 内外相互対応、カーナビ連携機能、外部公開コミュニティ

- 閉鎖性
完全招待制、後見人制、ステルスコミュニティ
- その他
地デジ対応機能、SNS モール機能、地域通貨ポイント機能

8. OpenSNP によるつながり活性効果の分析

米国の社会学者ジェームズ・コールマンは著書『社会理論の基礎』の中で「学歴や技能は個人に宿るが、ソーシャルキャピタルは関係に宿る」(1990)と述べている。社会的なつながりは単に接続していることが大切のではなく、その関係性を相互扶助的かつ互惠的に育み、互いにタイムリーに助け合える環境を成立させて、場合によっては相互の持つネットワークの力(人脈)まで投入できる関係づくりを行うことが重要である。

これを実現するには、地域 SNS がネット上で知り合った同士が友好を深めて関係性を向上させるだけでなく、すでに認知された関係にある人たちの関係性をより強く結びつけることが求められる。この状況を確認するためにひよこむにおいて「利用者関係性動向調査」を実施し、その結果を考察した。「ひよこむ」では、知人や友人をサイトに招待したり、サイト内でトモダチリンクを行う際に、リンク相手との「関係の深さ」と「接触の頻度」を5段階で入力する。学術的な分類ではないが、「関係の深さ」は「肉親・恋人」「親友・恩師」「友人・同僚」「知人程度」「これから」、[接触の頻度]を「頻繁」「月イチ」「年イチ」「イマイチ」「これから」に分けている。それぞれ関係に変化があればいつでも修正できるようになっているが、サイトの利用に影響のない項目なので、これまで当初に設定した後に変更された形跡はほとんどなく、組み込んだ時点のつながり関係(紐帯)が実質的に保存されている。

この環境を利用して、2008年8月26日～9月2日まで8日間、ユーザ全員にメッセージでWEBフォームによるアンケート参加を呼び掛けた。調査は、無作為に抽出された、本人とのリンクが成立してから1ヶ月以上経過したリンク最大10人まで対象として、[関係の深さ]と[接触の頻度]の更新と行い、また関係性と接触頻度の変化を、「よくなった」「少しよくなった」「変わらない」「少しわるくなった」「わるくなった」の5段階で、回答を求めた。期間中に、ユーザ総数約4,200人のうち394人(9.4%)が回答、合計3,103のリンクについてデータを回収した。

「関係の深さ」では、リンクした当初は全体の約65%を占めていた「これから」が約51%に減少している。これは、好意的な交流が成立し関係性が深まっていることを示している(図5)。最も強い「肉親・恋人」以外において大幅に向上していることを見れば、ひよこむが広く関係性の強化にある程度効果があったと言える。

「接触の頻度」で分かるのは、トモダチリンクをした時に約75%は相手に会ったことがなく、ひよこむを利用して

る間に約53%に減少している(図6)。これは「顔を合わせられる距離感」を対象とする地域SNSらしい現象で、多数のユーザが実際に会う機会を持ったということである。「頻繁」を除いて接触する頻度が増加しているが、「会わなくても用務を遂げられる」情報通信ツールを使いながら、その実体は逆に会う機会が全体として増えていることを示している。「とにかくバーチャルに限定されている」と考えられがちなICTが、リアルな社会の関係性を補完する役割を担う(和崎)という地域SNSの特徴が効果的に適用していることがわかる。

関係性と接触頻度には、ユニークな相関が見られた。それぞれリンク当時のレベルを基準として、相手との関係がどの程度改善、または悪化したかについて分析してみると、リンク当時の「関係の深さ」によって特徴のある傾向は見られなかったが、概ね約3割のユーザが関係が改善されており、地域SNSを使っている間に悪化した関係は、どのレベルにおいても非常に少なかった(図7)。また、十分に良好な関係を維持していると思われる「肉親・恋人」において、更なる関係改善の傾向が見られるなど、ひよこむが人脈の構築・醸成に一定の効果を示していると言える。

接触頻度の変化では、リアルな交流の機会を示す接触頻度が概ね2割前後が改善されており、会う機会が減少したという回答は少なかった(図8)。「年イチ」以上で定期的に会う機会を持つ相手とは、ひよこむを利用することによって、その機会が多いほど頻度が増加する傾向がみられ、「頻繁」に出会っていた相手との接触については、1/3が更に増加したと回答している。これは、もともと良好なリアル関係に

あった相手とひよこむで接続することにより、サイトにおける擬似的な常時接続環境が、日常的に相互の状態を可視化し、連携・協働の機会を増加させているものと考えられる。

この考察により、単にバーチャルなツールとして利用するユーザより、実際に会うことを通じて交流を深めることが関係性の向上に役立っており、一定数のユーザがそれを実施していることが分かった。また、新しいつながりに対する効果以上に、既存の関係に対して良好な接続環境を提供していることも明らかとなった。多くの地域SNSサイトが、開設から一定期間はユーザ数が増加するのに、次第に新たな参加者が減少して「踊り場現象」(和崎, 2007)という停滞期を迎えるのに対して、OpenSNPの各サイトはその傾向が小さい(または起こっていない)。この分析で明らかとなったユーザ個々によるつながりの可視化とそれを活性化するネット社会とリアル社会の連携的活用が、サイト全体のにぎわいを継続させる要素のひとつになっており、その基盤としてICT

図7 関係性の変化(筆者が作図)

図5 「関係の深さ」の変化(筆者が作図)

図8 接触頻度の変化(筆者が作図)

図6 「接触の頻度」の変化(筆者が作図)

図9 関係性と接触頻度の変化の相関(筆者が作図)

と日本型地域ネットワークの融合が寄与しているものと考えられる。

9. 創発の場としての情報プラットフォームの創造

日本型地域ネットワークの要素を取り入れた OpenSNP は、ひよこむでスタートした後、2008 年 6 月現在、館山（千葉）、伊丹（兵庫）、上田（長野）、横浜（神奈川）、宇都宮（栃木）、葛飾（東京）、三田（兵庫）、松江（島根）、盛岡（岩手）、佐用（兵庫）、熊谷（埼玉）の各地サイトで地域 SNS エンジンとして採用され、それぞれの地域独自の資源を活かしながら成長を続けている。また、岩手大学や関西学院大学では、学内外のコミュニケーション基盤として実験が開始され、世田谷区や鎌倉などでは、団塊世代の社会参加や特別障がい支援、同郷つながりなどという特定テーマに特化した交流の場としての活用が始まっている。

これらのサイトのほとんどは、総務省の地域 SNS 間連携 API12 を搭載している。複数サイトに登録しているユーザが主に利用しているサイトにログインすれば、他連携サイトの新着情報が自動的にチェックすることができる。連携 API は、OpenSNP だけでなく Open-gorotto にも対応しており、ユーザの負担が軽減されるだけでなく、サイト（地域）を越えた人的連携のきっかけを生んでいる。

SNS 間連携は、ユーザの利便性やつながりの創出・強化をもたらすだけではない。サイト運営者や開発者たちが積極的に緩やかな「仲間ネットワーク」¹³をつくり、運営や開発の情報を活発に交流させている。松江と姫路の技術者たちが、それぞれの持つ携帯動画や PC 動画の実装技術を提供しあい、通常なら 2～3 人月にかかる工期を 3 週間程度に抑えて、携帯・PC 共用のインターネット TV 機能を世界で初めて SNS に搭載したケースや、横浜や盛岡の開発チームが中心となって、OpenSNP をオープンソースとして公開する¹⁴基盤技術を構築したり、長野や熊谷のチームを中心に新たな機能実装を協働で進めるなど、これまでの事例にはみられない斬新かつ自発的で高度な技術連携が創発している。

このように「SNS は（ユーザと情報の）囲い込みで成立する」という常識にとらわれずに、「越境性」を意識した運用デザインを取り入れることにより、過去には想定できなかった新しい広がりや深まりを実現している。

「ほどよい閉鎖性を保つネットワーク」である地域 SNS では、その中で展開されている出来事を外部から観察することは非常に難しい。ログインして正規ユーザとして参加していても、サイト全体で何が起きているのかを総括的に把握するには、大変な努力が必要だ。地域 SNS の効果について、まだ一般化された研究成果が出されていないのは、サイトの多様性だけでなく、これまでの客観的参与観察では見えない部分が多すぎるからであろう。

しかし現実には、地域 SNS の中では、ユーザ間及び場としてのサイトとの「信頼」と地域への「愛着」を基盤として、「自発」→「連携」→「協働」→「創発」の善循環がわき起こっ

ている。ここでは、OpenSNP を採用する各サイトのエピソードをまとめた資料¹⁵から、いくつかの象徴的事例をピックアップする。

ひよこむには「デザインチーム」という主婦を中心にした 20 名ほどのグループがある。ウェブデザインを生業とする女性達が、自発的に技術情報を交流し始めた勉強会だ。立ち上がって間もない 2007 年 4 月、インフォミーム社に納車された新しいバンが真っ白だったので、いたずらで「ひよこむカーを作ろう」と投げかけたところ、彼女たちが一気に盛り上がった。次々とデザインシートが集まり、それをリーダー役の男性（千葉県在住）がコーディネートしていく。元来、ウェブデザイン仕事はチームでやるより個人で全ての工程をこなすことが多い。在宅ワークの彼女たちにとって、ネットを使った協働作業は初めての経験であったが、みんなの力で一気に仕上がっていく作品に、それぞれ感激と感動を隠せなかったという。同年 8 月「第一回地域 SNS 全国フォーラム」¹⁶（神戸）において、兵庫県公館の正面玄関に、ひよこむにおける協働のシンボルとして完成した「ひよこむカー」が展示され、来場者の注目を集めた。バラバラだった在宅ワーカーたちが、これを機会に自信をもち、その後多くの仕事を連携・協働で行っている。

地域 SNS では、よくオフ会と呼ばれるイベントが開催され、メンバが実際に出逢う機会を作っている。元気なサイトでは、コミュニティ毎に自発的かつ突発的に行われることが多いが、運営側が全体に呼び掛けて比較的大きな集まりを定期的にも実施することも活発に行われている。ひよこむでは最初の大規模オフは 2006 年 12 月のクリスマス会だった。「できるだけ誰でも気軽に参加して楽しめるように」と、大学の音楽堂を会場に借りて、飲み物や食べ物を持ちよるポトラック制とした。自慢の一品を持参することで会話が交流も弾む。そして参加費を集める必要もない。集まったのは 100 名近い人とモノだけではなかった。「子どもたちのために餅つきをしよう」「楽器を持ち込んで演奏しよう」。いろんな特技を持つ人たちが「勝手に」場を盛り上げてくれる。準備のプロセスを初動段階から公開することで「集合知」が顕在化し「協働知」を産み出し、新たな連携のモチベーションを高めるのである。何度かメーリングリストを使ってこの方法を

図 10 全国フォーラムに展示された「ひよこむカー」
(2007. 08. 31 に筆者が撮影)

採用していたが、地域 SNS を基盤とすることで実施効果は遙かに向上している。

地域 SNS と他メディアとの連携も活発だ。千葉県「房州わんだあらんど」ではコミュニティ FM と連動した「みなラジ」を開設したり、カーナビと情報連携させる企画を立ち上げるなど、積極的な取り組みを展開している。盛岡の「モリオネット」では、2008 年 6 月 14 日に発生した「岩手・宮城内陸地震」において、さまざまなメディアに流れる情報を地域 SNS に集約し、コミュニティとブログを外部公開で立ち上げ運用した。この迅速な対応は、安否・医療・被害・対策など地域が必要とする各方面の情報交換に貢献した。これらの運用には、新潟県中越地震の経験がある長岡の地域 SNS「おこなごーか」の指導も役立ったという。

地域 SNS の開発が縁でつながった松江と姫路の技術者たちが、互いの持つ映像処理技術を交換しあって、動画処理でパソコンと携帯の垣根を払い共用できるシステムを完成させた。それぞれ単独でもできない仕事ではないが、通常のほぼ 1/3~1/5 の工数で仕上げるという従来の開発手法では考えられない程の効率を発揮した。本来囲い込まれる開発技術や技術者本人を、信頼できる関係だから安心して自由に交流させられる。その結果として大きな成果が得られるという象徴的なケースだった。この事例と同様に、OpenSNP では、横浜・盛岡・上田・山形などの開発チームが協働して、多数の開発プロジェクトが進行している。

ロマンチックな話題もある。名古屋と兵庫に暮らす縁もゆかりもないはずのふたりの男女。お互い一度結婚生活に破れて、最愛の子ども達とも別れて暮らす境遇。ひょこむでのちょっとしたコメント交換の機会が、真面目な二人をいつしか引き寄せ合い、しばし遠距離を行き来する際へと深まって、祝福されてめでたく新しい家庭をふたりで創ることとなる。信頼できる仲間たちに励まされながら愛を育み互いを確認できたことは、きっと地域 SNS という温かい場の効果であつたに違いない。

このように地域 SNS の中では、ちいさなきっかけから生まれた数えられないくらい多くの出来事が自律・自発的に発生し、それらがひとりひとりのキーパーソンたちの連携を作りだしている。繋がった人たちは、信頼と愛着と常時接続状態に近いネットワークを基盤として互いに情報交流を行い、支援し合う関係になる。すると可視化されていく相互のネットワークを融合的に連携させた協働作業が見いだされることとなり、新たなアクションが創発的に拡大するのである。この「場のにぎわい」こそが地域 SNS の活力であり、安心で心地よい雰囲気が新たなきっかけから出来事を生み出す原動力となる。この循環が生活感 (Quality of life) の向上につながり、地域環境を高めていくのである。

10. 地域 SNS の展開と展望

OpenSNP では、信頼性の高い地元の口コミ情報の増殖である地域 SNS のコンテンツを、サイト外部にも積極的に提

供しようという動きが活発になっている。最初はブログやコミュニティを外部公開できるようにして、RSS を付けて外部発信することから始まったが、地域のインターネット TV として動画を流したり、カーナビや GPS 携帯などに位置情報をつけて流すことで用途を広げたり、電子モールと連携させてビジネスニーズにも応えたりと多様だ。08 年度には、ブロードバンド接続された地上波デジタル放送対応テレビに郵便番号単位で地域情報を提供する基礎実験も始まり、その可能性は更に拡大しようとしている。

しかし、いかなる機能を追加しても、どれだけのメンバを擁していても、「にぎわい」が感じられないサイトは持続可能性が低い。一般的に SNS やグループウェアなどの交流型サイトにおけるにぎわいの指標は、一定の期間内にサイト内で交わされるコミュニケーションの総和である。ページビューやデータ転送量もひとつの目安とはなるが、ブログへの投稿や返信、コミュニティへの発言やコメント、メッセージのやり取りなど、可視化されたコミュニケーションが直接ユーザ感じるにぎわい感となる。

しかし、各地域 SNS サイトのにぎわい度を分析するにおいて、定期的にコミュニケーション総量を公開しているサイトはほとんどない。そこでひょこむのコミュニケーションを分析した (図 11) のグラフから、月次のコミュニケーション総量と相関のあるとみられる「紐帯数」と「会員数」のうち、他のサイトでも状況が公開されている「会員数」の伸長に注目することとした。

全国各地の地域 SNS の中で、参加者数が確認できた 46 サイトを継続調査した結果、最近半年間で会員数の増加率が高いサイトは (表 3) のようになった。どの地域 SNS でも開設から 3 ヶ月から半年間は、急激に会員が増加する傾向が見られるので、07 年 11 月に運用開始された盛岡・佐用・松江については割り引いて見る必要がある。この表からは、運営主体が行政であろうと民間であろうとサイトのにぎわいにはあまり関係ないことがわかる。また、完全招待制や後見制を採用しているサイトが上位を占めているところから、ネットワークの信頼を担保することが持続可能性を高める重要な要素であることがわかる。

次に、実験段階も含めた立ち上げ 3 ヶ月間に各地のサイトがどのような伸びをしたのかをグラフにしたのが (図

図 11 ひょこむのアクセス解析 (筆者が作図)

12)である。どのサイトも3ヶ月間で250～300名前後となっており、特に際だった相違は見当たらない。それぞれの地域で拡大手法が異なるので一概には言えないが、人口360万人の横浜も、30万人の南房総も、2万人の佐用も、立ち上がりの段階は大きな違いはない。これは人のつながりがそのままネットワークとして可視化され反映していく招待制のサイトでは、地方でも「強い紐帯」で繋がっている人脈を活かして、大都市と変わらない立ち上げが可能であることを意味する。08年5月に実験サイトを開いた熊谷（埼玉）では、「うちわ祭」という地域あげでの祭りの人脈ネットワークが繋がって僅か60日あまりの間にメンバが300人を越え、活発な交流が始まっている。地域SNSの立ち上げにおいては、そのエリア規模に注目しすぎずに、「強い紐帯」で繋がっている実際の地域活動のネットワークと、SNSサイトの「弱い紐帯」の融合を図ることで、より順調に成長させることが可能になると考えられる。

表3 地域SNSの会員伸長（08年01月01日-07月01日）
（筆者調査により抜粋して作表）

PNE：OpenPNE/SNP：OpenSNP/GRO：Open-gorotto/
ORG：独自ソフト

地域名	設置／運営	08／01	08／07	伸長率	入会方法	承認制	エンジン
盛岡	行政／官民	169	581	3.44	招待	後見	SNP
佐用	行政／官民	142	335	2.36	招待	後見	SNP
松江	行政／行政	213	461	2.16	招待	後見	SNP
横浜	官民／民間	837	1527	1.82	招待	後見	SNP
三田	民間／民間	167	272	1.63	招待	後見	SNP
伊丹	高校／高校	575	881	1.53	招待	後見	SNP
上田	大学／大学	410	565	1.38	招待	無し	SNP
千葉	民間／民間	1959	2620	1.34	招待	無し	PNE
福岡	行政／行政	523	676	1.29	招待	無し	ORG
京阪奈	民間／民間	159	203	1.28	自由	無し	PNE
葛飾	官民／民間	444	543	1.22	招待	後見	SNP
掛川	行政／行政	1180	1425	1.21	自由	無し	GRO
兵庫	民間／官民	3322	3995	1.20	招待	後見	SNP

図12 地域SNSの会員数推移（実験期間を含む）
（筆者が作図）

11. 最後 に

地域情報化という言葉が使われ始めて30年。巨額の投資を繰り返してきた政府の開発主義的な政策だけでなく、80年代の草の根BBSや商用BBSというパソコン通信を使ったコミュニケーションの試みや90年代のインターネットによるさまざまなアプリケーションの活用に至るまで、開発に携わる技術者たち共通の悩みは、情報化ツールの効果が地域に浸透しないことだった。日夜新しいテクノロジーを取り入れ、地域ニーズを捉えたシステムを設計し投入する彼らの努力は、皮肉にも「すべてを情報技術で解決しよう」という傲った開発思想による現場とのミスマッチが起こしたジレンマによるところが大きかった。

01年10月、日本で最初の電子地域通貨「千姫」の運用を開始した岡田真美子¹⁷は、インターネットや携帯から利用できるシステムとして、メニュー表・掲示板・コメント付き取引という非常にシンプルで大福帳式プログラムを採用した。この仕組みはのちのち参加者のニーズによって成長し、同時に利用者のモチベーションもあがっていった。岡田は当時から「完璧なシステムを求めずに、十分に人の絆の持つ力を活用することで、システムも人も育っていく」と語り、従来とは異なる開発手法を取り入れて地域情報化の世界に新たな方法論を提案した。あえて「人」がかかわる部分を明示することによって、システムと人材が相互に支え合い活かされる共育の関係がデザインされていた。

本論で示すように、地域住民の関係性を活性化することを目的とする地域SNSの設計や運営には、ICTと伝統的な日本型地域ネットワークの知見を融合的に取り扱うことの重要性が、OpenSNPの展開によって明らかとなった。その過程では、「ネットワークはオープンであるべき」や「参入障壁は低い方がよい」とか「効率的に運用すべき」などという、従来のシステム設計やサイト運営において定説や常識として考えられていたのとはまったく逆のアプローチ、すなわち「ほどよい閉鎖性を保つネットワーク」「完全招待や後見制という敷居の高い加入手続き」「何事も環境が整うまで十分な時間をかける」ことなどがしばしば有効であった。これには、情報工学、社会学、民俗学、複雑系など、多様な先行研究を学際的に取り扱い、新たな関係性価値創造の手法を見いだす感性工学的な考察が活かされた。

OpenSNPは、持続可能な地域SNSエンジンであるだけでなく、地域のネットワークが持つ潜在した関係性の力を可視化し活用することで、科学技術や経済的手法では埋められなかった多様な社会の隙間や歪みを埋めるきっかけを作ることができる。また、急速に弱体化しつつある地域のエンパワーメント（地域力）を覚醒させることも可能である。「ほどよい閉鎖性を保つネットワーク」が、地域の枠を越えて連携・協調することにより、都会だけでなく人口の比較的少ない郡部においても、地域固有のコミュニティ活動の活性化を誘発しながら、まちを元気にする原動力として役立てることができる。

今後、地域 SNS は、限定した交流型サイトとしての役割はもちろんのこと、さまざまな地域の信頼できるクチコミ情報をコンピュータ以外の多様なチャンネルを通じて多数の住民が共有する「情報プラットフォーム」として成長をしていくことが期待される。そうなれば、地域内における情報の循環が促進されることによって、これまで一極集中していた情報の流れが徐々に変化して「情報の地産地消¹⁸⁾」(和崎)が実現し、人材流出・経済疲弊・少子高齢化などの地域課題を解決するコミュニティの社会基盤創造の可能性が視野に入ってくるに違いない。

参 考 文 献

- [1] 岡田真美子：地域をはぐくむネットワーク，昭和堂，8，2006
- [2] 牧慎太郎：知縁コミュニティと地域 SNS の展開，月刊自治フォーラム 2 月号，自治大学校，pp.25-32，2008
- [3] [4] [5] 庄司昌彦：地域 SNS サイトの実態把握，地域活性化の可能性，情報通信政策研究プログラム，pp.15-16，18，2008
- [6] 国領二郎：地域情報化認識と設計，NTT 出版，pp.145-146，2006
- [7] 岡田真美子：地域づくりと実践的学問—地域ネットワークの継承と再生を目指して，日本の空間学，東信堂，pp.135-136，2008
- [8] 和崎宏：地域 SNS 最前線-Web2.0 時代のまちおこし実践ガイド，アスキー，pp.177-179，2007
- [9] 吉田等明：オンラインでの匿名性と倫理観，コンピュータ & エデュケーション vol24，東京電機大学出版局，pp.20-25，2008

¹ SNS エンジンとは，SNS システムの基盤プログラム，OpenSNP は，'open social networking platform' の略。

² 考察においては，開発者かつ運営管理者として「ひょこむ」，共同運営管理者として「三田」「伊丹」「熊谷」「横浜」「葛飾」「佐用」「南房総」(以上は管理権を持つ)，運営チームメンバとして「上田」「盛岡」，運営顧問として「松江」「栃木」，また一般ユーザレベルでその他 33 サイト(計 46 サイト)の参与観察を行った。

³ 1999 年に設立された匿名掲示板群で，利用者が自由にボードを設置できることから急成長し，ネット社会の荒廃の代名詞化されることが多い。

⁴ OpenSNP では，最初の適応サイトとしてのひょこむを，機能開発やシステム運用のテストベッドとして利用している。ひょこむは，招待制では日本最大の地域 SNS サイトとなっている(2008 年 8 月現在)。

⁵ 兵庫県が平成 19 年度から継続して実施している「地域 SNS 活用実

証実験事業」。平成 20 年度はワンセグ地域放送局と地域 SNS の連携を実施。全体では 700 名近い県職員が実験参加している。

- ⁶ 神戸・横浜で開催された「地域 SNS 全国フォーラム」のセッションにおいて，複数の SNS 運営者により同様の発言があった。
- ⁷ ひょこむの「ひょこむ塾」，モリオネットの「ブドリーズ」，かちねっとの「かちねっど広場」などは，技術サポートだけでなくユーザのコミュニケーション相談の場になっている。
- ⁸ セミナーに関する内容が報道されているニュース記事は，
<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/0601/27/news118.html>
- ⁹ この時，八代市の「ごろっとやっちょろ」をベースとした Open-gorotto と，(有)手嶋屋が提供する OpenPNE という二つのオープンソースが利用されていた。オープンソースは無料でプログラムが入手できる利点はあるものの，その修正や改造には独自で開発する以上の作業工数が発生することが難点である。
- ¹⁰ (財)地方自治情報センターが開発した「地域 SNS 連携 API」に対応。
- ¹¹ openSNP で実装した機能は，他の SNS エンジンにおいてその後採用されていくものが多い。
- ¹² http://www.lasdec.nippon-net.ne.jp/rdd/community/h19koubo/h19yoryo_ecom2_bt.pdf
- ¹³ 「OpenSNP developers party」というグループを作って，常時情報交換を行い協働プロジェクトを推進している。
- ¹⁴ 段階別に 2008 年 9 月と 2009 年 3 月にわけて，オープンソースプログラムとして一般公開の予定。
- ¹⁵ 詳しい資料は，
<http://opensnp.jp/episode1.pdf>
- ¹⁶ フォーラムの様子は，下記にレポートされている。
<http://itpro.nikkeibp.co.jp/article/COLUMN/20070913/281853/>
- ¹⁷ 兵庫県立大学環境人間学部教授
- ¹⁸ 地域情報が地域内で循環するデザインを構築することにより，ヒト・モノ・カネにも地域で循環するシステムができあがるという考え方。1980 年代後半から 90 年代前半にかけて，米国シリコンバレーの復興を支えた Joint venture way (ジョイントベンチャー方式)は，情報化によって潜在化していたインフォーマルなネットワークを可視化することで，ソーシャルキャピタルの活性を促し，地域の経済・文化・教育・生活環境の向上を実現したモデルである。

和崎 宏 (学生会員)

1957 年 12 月 22 日福岡県生れ インフォミー株式会社代表取締役，80 年琉球大学理学部卒，04 年兵庫県立姫路工業大学大学院環境人間学研究科にて修士課程を修了。現在，兵庫県立大学大学院環境人間学研究科博士後期課程在籍中。日経地域情報化大賞 2004 (CAN フォーラム賞)，平成 16 年度地域づくり総務大臣表彰，日経地域情報化大賞 2008 (グランプリ) を受賞。07 年から，総務省地域情報化アドバイザー。共著に「地域 SNS 最前線-Web2.0 時代のまちおこし実践ガイド」(アスキー)，「地域をはぐくむネットワーク」(昭和堂) などがある。